

男声合唱とピアノのための

『ぼくの村は戦場だった —あるジャーナリストの記録—』

曲 信長貴富

この作品はテノールの清水雅彦氏の委嘱により独唱版として作曲されたのが最初で、そのあと都留文科大学合唱団（指揮＝清水雅彦）により混声合唱版が作られました。去年は宇都宮中央女子高校（指揮＝吉岡訓子）によって女声合唱版が初演され、今日の男声合唱版初演ですべての編成が揃った形となります。

サブタイトルに「あるジャーナリスト」とありますが、これは2012年8月に中東シリアでの銃撃によって亡くなった山本美香さんのことを指しています。独唱版が初演されたのは2014年1月で、山本さんが亡くなってからまだ1年半という時期でした。

本作の歌詞は、山本さんの三つの著作『ぼくの村は戦場だった。』（マガジンハウス）、『戦争を取材する』（講談社）、『中継されなかったバグダッド』（小学館）から抜粋した上で、舞台用の言葉として私が編集したものを中心に構成しています。

そのほかに、子ども兵の描写（第三章）のために『子ども兵の戦争』（P.W.シンガー著、小林由香利訳、NHK出版）を、また、戦争に巻き込まれた子どもたちの肉声（第四・五章）として『目をとじれば平和が見える 旧ユーゴスラビアの子どもたちが描く戦争』（ユニセフ編、ほるぷ出版）と、『チャンスがあれば… ストリートチルドレンの夢』（「チャンスの会」編・訳、岩崎書店）を参照しています。これらの文献は山本美香さんとは直接の関係はないのですが、山本さんが戦争の中で暮らす子どもたちの姿を多く取材されていたこと、また、戦争から子どもを守るために教育の重要性を訴えていたことを重視して、私なりに歌詞を構成していったという経緯から来ています。

独唱版出版譜の解説から、特にお伝えしておきたいことを以下に引用しておきます。

歌も一つのメディアであると捉えたとき、作曲という作業にも或る種のリスクが伴っていることを、作り手は自覚しなければならない。何かを伝えるということは、背後に膨大な「伝えないこと、伝えられないこと」があるからだ。ジャーナリズム論的にいえばそれは編集のリスクということになるだろう。メディアが「マス」であればあるほど、編集権は絶大な力を持ち得る。それは権力を監視する力となって市民の声を代弁する働きをすることもあれば、権力と一体となって世論を誤った方向に誘導することもある。歴史を振り返るまでもなく、現在の日本のマス・メディアが何を伝え、何を伝えていないか注意深く観察していれば、自ずと編集のリスクについて自覚することになるだろう。

清水雅彦氏からジャーナリスト・山本美香さんの著作をもとにした声楽作品を、とのご提案をいただいたとき、最初に課題と感じたのが編集のリスクについてだった。山本美香さんの残した仕事のどこを切り取るか、切り取らないか、結局は私の主義主張のフィルターを通過させなければならない。山本さんご自身も著作の中でマス・メディアへの自己批判も含めて編集リスクについて言及されているから、私も彼女のころろざしにならって、編集の罪に自覚的であろうと誓いつつ作業を進めた。

（文 信長貴富）

# SUPERNOVA!

スーパーノヴァ!

2022年

4月9日(土) 17:30 開場  
18:00 開演

杉並公会堂  
大ホール

配信  
TICKET 1,500円

イープラスが運営する Streaming+ にて  
ご購入・ご視聴いただけます。

配信チケットは当日同時刻のライブ視聴および  
公演終了後～4月15日(金) 23:59 までアーカイブ視聴が可能です。

<https://eplus.jp/sf/detail/3585540001-P0030001>

男声合唱とピアノのための  
『Fragments —特攻隊戦死者の手記による—』

曲 信長貴富

「逝く春に寄せて」

『男声合唱とピアノのための「Fragments」—特攻隊戦死者の手記による—』は、副題の通り作曲者の信長貴富によって収集された軍令や手記の断片（Fragments）によって構成されている。特攻隊とは特別攻撃隊の略称で、大戦末期に編成された自らの死を伴う体当たり攻撃隊のことを指す。

来るべき死を眼前にした隊員たちの言葉は、一瞥すると自らを犠牲にしても故郷や家族を守るという強い決意に満ちている。しかしながら、あくまで推察する他ないが、彼らの手記には多くの「嘘」が含まれている。決して彼らの決意そのものを否定する意味ではないが、「俺が消えたからとて、何も悲しむことはない」と書き残した男には、自らの死を受け入れる一方で、誰かにこのやるせなさを汲み取ってほしいという思いがあったような気がしてならない。こうした彼らの言葉を、体制に抗うことができなかつた弱さとして、あるいは大勢に流されてしまった甘えとして切り捨てることは容易だ。しかし、私たちがするべきは本当にそういった判決を下すことなのだろうか。国家という途方もなく大きな虚構に呑み込まれてしまったひとりひとりの若者が紡いだ言葉を、洗脳だと指差し迎合だと嘲笑うことに何の意味があるだろう。

私たちは、彼らの知らない77年前の真実を知っている。あの日の正義がどこに属していたのかを知っている。しかし例え私たちが時を遡ることができたとしても、彼らを導こうと声を上げ戦うことはできるのだろうか。私たちは彼らと地続きの世界に生きている。彼らの叫びは平和への祈りや戦争への怒りであるよりも前に、時代に翻弄され悶え苦しみながら生きた青年たちの叫びなのだ。それは「77年前の私たち」の叫びだ。

この世界は、数多の「なんとなく」で溢れている。ひとびとは今日を生きるために精一杯で、残された1日が無為に減り、来るべき死が確実に近づくことに目を逸らしながら生きている。どこかで起きている飢餓や貧困そして戦争と同じ世界で生きていることをなんとなく否定し、なんとなく肯定しながらすごしている。それらを批判し、確かな哲学や確固たる信念をもって抗うことができるのが正しい人間なのだろう。願わくは私たちもそのような人間でありたい。しかし、彼らや私たちにはそれができない。正しさが衝突し暴力となることを恐れてしまう。短慮だと窘められることを恐れて口を噤んでしまう。建前で重ねた嘘を反芻し、本心ではない自分の言葉に傷ついてしまう。

彼らは呑み込まれてしまった。私たちもまた呑み込まれている。強く在ることが出来ないのなら、せめてこの違和感を、彼らが語った言葉に耳を澄ましたい。彼らの嘘に裏写りした真実からは77年後を生きている私たちと同じ叫びが聞こえてくる。正しい言葉ではないかもしれない。闇雲に叫んでいるようにしか聞こえないかもしれない。それでも私たちは叫び続ける、この変わりなく続く苦しみと向き合うことこそが生きる意味だと信じて。

(文 宮城太一)

掲載にあたり2018年に執筆された文章を一部改稿しています

# SUPERNOVA!

スーパーノヴァ!

2022年

4月9日(土)

17:30 開場  
18:00 開演

杉並公会堂  
大ホール

配信  
TICKET

1,500円

イープラスが運営する Streaming+ にて  
ご購入・ご視聴いただけます。

配信チケットは当日同時刻のライブ視聴および  
公演終了後～4月15日(金) 23:59 までアーカイブ視聴が可能です。

<https://eplus.jp/sf/detail/3585540001-P0030001>

男声合唱とピアノのための

## 『祈りの虹』

曲 新実徳英

## 曲 新実徳英 (1947～)

愛知県生まれ。東京藝術大学大学院研究科修了。東京大学在学中に作曲活動を志し、三善晃に師事していた。作曲傾向としては抽象的で難解な作品と調性で書かれた作品に二分される。桐朋学園大学院大学教授、東京音楽大学客員教授。

## 詩 峠三吉 (1917～1953) 『炎』

大阪府生まれ。生後すぐ広島に移住。広島商業学校在学中より詩作を始める。28歳で被爆。1951年『原爆詩集』を自費出版した。『炎』はこの詩集の四番目に収録されている。

## 詩 金子光晴 (1895～1975) 『“業火”より』

愛知県生まれ。慶応義塾大学中退後に詩作を始める。社会批判を込めた詩を多数発表している。詩集『鬼の児の唄』(1947)に所収の『業火』は1944年7月の作であり、原爆に関連はないが、その後の戦火を想起させる。

## 詩 津田定雄 (1928～1975) 『ヒロシマにかける虹』

福井県生まれの教師。広島高等師範学校在学中に被爆するが軽傷。以後、『ヒロシマにかける虹—長篇叙事詩』を長年に渡り創作していたが、発表前に急死。家族と関係者が遺稿を自費出版した。この詩は、1955年に平和公園の記念館から見た虹が契機となっており、曲中で扱われているのは終章Ⅱの部分である。

## 曲について

1984年、大阪大学男声合唱団による委嘱。広島に投下された原子爆弾を題材とし、平和と人類の浄化への願いを込めて作曲されたこの曲は、3人の違う詩人の反戦詩による3つの楽章と、ヴォーカリーズによる楽章で構成され、冒頭とフィナーレに引用されたArcadeltのAve Mariaが包み込む構成となっている。楽章間はすべてattaccaで繋げられ、ひとつの叙事詩のように演奏される。

## Ⅰ 炎

平和の祈りが歪んでゆき、断絶され、突如、崩壊が訪れる。曇みかける言葉と音の驟雨、時間が歪んだような浮遊感が繰り返される。1945年8月6日午前8時15分。ヒロシマは地獄と化した。

## Ⅱ “業火”より

炎が猛り狂い、死と破壊に埋め尽くされた地獄絵図が描写される。神は冒涇され、叫び声、呻き声等、言葉にできない声が響き続ける。

## Ⅲ ヴォーカリーズ

すべてが灰塵と化した瓦礫の街。無明の夜の闇から吹き渡る風が奇妙な音を奏でる。それは死者たちの無念を訴える声。祈りにならぬ歌。

## Ⅳ ヒロシマにかける虹

悪夢は過ぎ、かつて廃墟だった街に朝がやって来る。平和祈念式典の情景。平和を希求する人々の祈りは昇華され、救済の虹が掲げられる。そして再び平和の祈りが高らかに歌われ、穏やかなフィナーレを迎える。

(文 金子剛史)

## SUPERNOVA!

スーパーノヴァ!

2022年

4月9日(土)

17:30 開場  
18:00 開演杉並公会堂  
大ホール

配信

TICKET 1,500円

イープラスが運営する Streaming+ にて  
ご購入・ご視聴いただけます。配信チケットは当日同時刻のライブ視聴および  
公演終了後～4月15日(金) 23:59までアーカイブ視聴が可能です。<https://eplus.jp/sf/detail/3585540001-P0030001>